

学位論文審査の結果の要旨

|            |  |
|------------|--|
| 1. 申請者氏名   | 中西 裕子  |
| 2. 審査委員    | 主査：（鳴門教育大学 教授） 高橋 眞琴<br>副主査：（鳴門教育大学 教授） 池田 誠喜<br>委員：（滋賀大学 教授） 渡部 雅之<br>委員：（岡山大学 教授） 片山 美香<br>委員：（鳴門教育大学 教授） 久我 直人  |
| 3. 論文題目    | 聴覚障害教員と聴教員が協働した聴覚障害理解に関する研究  |
| 4. 審査結果の要旨 | <p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座中西裕子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和8年2月13日（金） 10時40分～11時30分<br/>                 場 所：ZOOMによるオンライン実施</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 研究の背景と目的</p> <p>第1節 聴覚障害児の障害理解と教育的課題</p> <p>第2節 通常学校における聴覚障害理解教育の現状と課題</p> <p>第3節 聴覚障害理解教育における理論と用語の整理</p> <p>第4節 障害理解を支える教育的支援と教員の協働</p> <p>第5節 本研究の目的と意義</p> <p>文献</p> <p>第2章 聴覚障害理解に関連する研究動向</p> <p>第1節 聴覚障害児の聴覚障害理解を中心とした研究動向</p> <p>第2節 聴覚障害教育における聴覚障害教員との協働</p> <p>第3節 通常学級における聴覚障害理解</p> <p>第4節 今後の課題</p> <p>文献</p> <p>第3章 聴覚障害教員と聴教員の協働による聴覚障害理解教育<br/>                 —特別支援学校（聴覚障害）の聴覚障害教員と聴教員の視点より—</p> <p>第1節 問題と目的</p> <p>第2節 方法</p> <p>第3節 結果</p> <p>第4節 考察</p> <p>第5節 今後に向けて</p> <p>文献</p> <p>第4章 学校間連携授業による聴覚障害理解<br/>                 —和歌山県の高等学校と特別支援学校の履修者の変容—</p> <p>第1節 問題と目的</p> <p>第2節 方法</p> <p>第3節 結果</p> <p>第4節 考察</p> <p>第5節 今後に向けて</p> <p>文献</p> |

## 第5章 聴覚障害教員と協働した聴覚障害児及び聴児を対象とした聴覚障害理解教育プログラムの構成

第1節 本章の目的

第2節 基本理念

第3節 聴覚障害児向けプログラムの構成

第4節 聴児向けプログラムの構成

第5節 当事者性と社会モデルを軸とした協働的アプローチの意義

文献

## 第6章 総合考察

第1節 本研究の総括

第2節 特別支援学校（聴覚障害）教員による通常学校支援の現状と課題

第3節 特別支援学校（聴覚障害）における聴覚障害教員と聴教員の専門性の統合と協働

第4節 学校教育学への示唆

第5節 本研究の限界と今後の課題

文献

謝辞

本研究の目的は、聴覚障害教員と聴教員の協働による聴覚障害理解の指導に関する研究を通して、聴覚障害児及び聴児の双方に対する聴覚障害理解教育プログラムの構成を検討することであった。当事者教員との協働を基盤とした聴覚障害理解教育の可能性を検討することにより、インクルーシブ教育システムの理念を具体化し、両教員の専門性を活かした教育を特別支援学校（聴覚障害）内だけに留めず、通常学校への支援に参画する意義を明らかにし、当事者性の知見をいかにして教育現場に還元できるかを検討している。本論文全体は、6章構成となっている。

第1章では、聴覚障害児の障害理解と教育的課題、通常学校における聴覚障害理解教育の現状と課題、障害理解教育における理論と用語、障害理解を支える教育的支援と教員の協働について整理した上で、聴覚障害教育における「社会モデル」への転換と、当事者教員との協働による教育的支援の意義を検討し、本研究の問題と目的、構成を提示している。

第2章では、国内外の聴覚障害理解に関連する研究動向を検討している。第1節では、聴覚障害児の自己の障害理解やセルフアドボカシーに関する研究動向を整理し、「自己理解（内面）」から「ツールによる言語化（媒介）」を経て、「セルフアドボカシー（行動）」へと至る構造があると考察している。第2節では、聴覚障害教員と聴教員の協働による研究動向を整理し、「専門性の高い教育体制」と「多様性を日常的に体験する場」を構築すると考察している。第3節では、通常学級における聴覚障害理解の研究動向より、「包括的理解（認知・情緒・行動）」は、聴覚障害児の発信（ツール化）を受け入れ、協働的な環境（自然な関わり）を実効化するための基盤であると考察している。その上で、第4節において、児童生徒・教員・学習環境が相互に影響し合う包括的支援モデル構築の必要性を提起している。

第3章では、聴覚障害教員と聴教員双方へのインタビュー調査について、質的研究法を用いて分析し、聴覚障害理解における両教員の認識の差異を明らかにしている。聴教員が困難を予測して「先回り」する傾向があるのに対し、聴覚障害教員は児童生徒自らが困難を抱いた瞬間を捉え、共に解決策を模索する「当事者主体のプロセス」を重視しており、聴教員だけでは捉えきれない指導の空白を、聴覚障害教員との対話により補完していることを実証している。

第4章は、特別支援学校（聴覚障害）と高等学校による1年間の学校間連携授業（計33回及び行事）を自ら「聴覚障害教員と立案・協働の上実践し、生徒の意識変容のプロセスを第1期～第3期に分けて分析した内容となっている。単位認定対象となる継続的な学校間連携授業は、全国的にも希少な内容となっている。当初、高校生らは同情的な障害観を抱いていたが、当事者である特別支援学校生や聴覚障害教員との対話的な学びを重ねる中で、対等な関係性へと変容している。また、研究期間を通して、聴覚障害教員と聴教員が、授業計画段階から対等なパートナーとして授業内容を共に組み立て、反省と修正を繰り返しながら運営を重ねるといった協働により、生徒の深い変容を導き出す実践的道筋が確固たるものとなったと考察している。

第5章では、各章の知見を統合し、各学部・学年段階に応じた包括的な教育プログラムを提案している。本プログラムの理念として、教員間の協働を核とし、聴覚障害教員の「ロールモデル」と聴教員の「共生への媒介」を機能させること、聴覚障害児の「自己理解・セルフアドボカシー」と、聴児の「対等な認識・社会モデルへの気づき」を相互作用させることを掲げている。聴覚障害児に対しては、聴覚障害教員による「寄り添い・共感」を中心に据え、幼児期の自己肯定感の醸成から中・高等部での社会資源の活用に至るまで、自己理解とセルフアドボカシーを段階的に高める構造を示したプログラムを、また、聴児に対しては、聴教員による「対話の補聴・合意形成」の支援を通じ、心理的障壁を可視化し、共に環境を再構築していく「他者理解」のプロセスを体系化したプログラムを提示している。

第6章では、総合考察として、本研究の総括をした上で、聴覚障害教員と聴教員の専門性の協調と組織的な協議体制の構築について、提言している。本研究が提示した包括的な教育プログラムは、聴覚障害児と聴児の双方を対象とし、教員間の協働を介して両者の変容を連動させる構造を持つ。この点は、従来の「聴覚障害児への支援」「聴児への理解教育」という二分法を超え、学級全体を一つの学習共同体として捉えている。また、実効あるプログラムに向けては、聴覚障害教員の専門性（当事者性・経験知）と聴教員の専門性（学級経営・コミュニケーション調整）を相補的に活かすことを提言している。この構造は、学校教育学における「協働のデザイン」の新たなモデルとして位置づけられる。

## 2. 審査経過

本論文の主要部分は、2編の査読付き学術論文として、日本学術会議協力学術研究団体の全国学会誌である『教育支援協働学研究』（第一著者 日本教育支援協働学会誌 2024年）及び『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』（単著 日本福祉教育・ボランティア学習学会誌 2024年）で構成される。これらの研究成果の内容及び学位論文全体の内容の審査を踏まえ、5名の審査委員が討議した点は、以下の通りとなっている。

### (1) 研究目的と論文構成の整合性について

本論文は、聴覚障害教員と聴教員の協働による聴覚障害理解の指導に関する研究を通し、聴覚障害児及び聴児の双方に対する聴覚障害理解教育プログラムの構成を検討することを研究目的としている。論文構成は、本目的に沿って、聴覚障害児の障害理解と教育的課題、通常学校における聴覚障害理解教育の現状と課題、聴覚障害理解教育における理論と用語の整理をした上で、さらに、国内外の聴覚障害理解に関連する研究動向を整理している。また、聴覚障害教員と聴教員双方へのインタビュー調査内容を質的研究法で分析し、聴覚障害理解における両教員の認識の差異を明らかにすると共に、学校間連携授業の計画・立案を自ら実践者として、聴覚障害教員と協働して行っている。先行研究の内容と自身で行った実践的研究の内容を省察・照合した上で、聴覚障害児に対しては、聴覚障害教員による「寄り添い・共感」を中心に据え、幼児期の自己肯定感の醸成から中・高等部での社会資源の活用に至るまで、自己理解とセルフアドボカシーを段階的に高める構造を示したプログラムを、また、聴児に対しては、聴教員による「対話の補聴・合意形成」の支援を通じ、心理的障壁を可視化し、共に環境を再構築していく「他者理解」のプロセスを体系化した各学部・学年段階に応じた包括的な聴覚障害理解プログラムを自身の長年の実践や教育相談での知見を踏まえ、提案している。総合考察では、今日の聴覚障害教育の現状と課題を踏まえた上で、学校教育学への貢献や本研究の限界について示している。したがって、研究目的に整合する妥当な論文構成であると評価できる。

### (2) 先行研究の概観について

第2章の先行研究部分については、聴覚障害児の自己の障害理解やセルフアドボカシーに関する国内外の研究動向、聴覚障害教員と聴教員の協働による国内外の研究動向、通常学級における聴覚障害理解の国内外の研究動向という形で、3つの節に分けて、整理されており、うち1節は、大学紀要論文1編として掲載予定となっている。第2章の先行研究部分については、上記のように、丁寧に整理、記述がなされることで、第5章の聴覚障害児、聴児双方の各学部・学年段階に応じた包括的な聴覚障害理解プログラムの策定にも結びつく理論的な根拠になっていると審査委員会でも評価された。

### (3) 論理的文章表現及び分析・考察の客観性について

聴覚障害教育における用語や文章表現については、長年の教育相談業務での知見から審査委員の質問に対しても詳細に回答しており、聴覚障害教育において、一般的に理解可能な文章表現がされている。第3章及び第4章で行った実践的研究の一般化についても、先行研究の内容と自らの実践内容の省察結果を照合した上で、考察に至っており、分析・考察の面での客観性を高める努力が行われている。

### (4) 学校教育学の学位論文としての独創性及び発展性について

聴覚障害教員と聴教員の指導観の差異を本研究の中で抽出したことは、大きな意味があり、可視化し教員間で共有することで、聴覚障害児と聴児の対等性や多様性を認め合うインクルーシブ教育の推進にもつながっていく。また、収集されたデータについても今日の交流及び共同学習のあり方に、一石を投じている内容であり、異なる学校間といった別々の組織が協働して学習を運営する際の重要な知見を提供している。第5章の聴覚障害児、聴児双方の各学部・学年段階に応じた包括的な聴覚障害理解プログラムについては、日常的に、保護者や地域の学校園教員から寄せられる多数の教育相談の知見や本研究科在籍中の研究活動（全国学会発表での研究者との意見交換、全国の聴覚障害特別支援学校教員に向けた調査によるニーズ把握等）を基盤として考案されており、独創的でさらなる発展が見込める内容となっている。

### (5) 学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

特別支援教育における教員の専門性の向上については、喫緊の課題となっている。また、全国の聴覚障害特別支援学校においては、聴覚障害教員が配属されていない状況もあり、聴覚障害教員と聴教員の協働は制度的には、確立されておらず発展途上である。通常の学校においても聴覚障害教員が一定数勤務していると推察されるが、教員間の協働を明らかにした研究は、あまり見当たらない。通常の学校での勤務から異動し、初めて聴覚障害教育に携わる教員が存在する状況もあり、教員の専門性の担保や力量形成が求められる分野と考えられる。教員の指導観が聴覚障害教員と聴教員で異なることを提示した点は、教員間の協働に資するものであり、聴覚障害児、聴児双方の各学部・学年段階に応じた包括的な聴覚障害理解プログラムを聴覚障害教育に携わる教員の研修や聴覚障害教育の実践で活用することで、教員の専門性の向上に寄与する内容となっている。以上により、本論文は、学校教育学に貢献する成果が認められ、今後の学校教育学の発展に寄与する論文であると評価できる。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、中西裕子が提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると評価し、全員一致で合格と判定した。